

# 聴覚障害幼児の音韻意識の指導プログラムの試作と その発達評価に関する研究

大 島 光 代 (愛知県立一宮聾学校)  
都 築 繁 幸 (愛知教育大学障害児教育講座)  
新 美 奈緒子 (愛知教育大学情緒障害教育教員養成課程)

**要約** 音韻意識を高めるゲームとして「ことはちゃんのことばのがくしゅうげーむ」を試みた。これは、「生活の中で知っていることば」を視覚情報として提示し、段階を追って正しい日本語表記へと導くためのゲームソフトとして作製したものである。これを用いて音韻の発達を検討した。

聴覚障害児の音韻意識の発達は、加齢に伴って上昇する傾向はあるものの、健聴児の発達段階には及ばない。健聴児群においてはどの音節数においても年中児・年長児群の正答率が70%を超えており、健聴児においては年中児の段階で音韻意識が獲得されている。音節数の正答率を比較すると健聴児も聴覚障害児も音節数が増えることばを組み立てにくくなる傾向が示された。

聴覚障害児群において聴力レベルでは、すべての音節数において91dB以上の群の方が正答率がよく、聴力が厳しい子どもの方が担任の目に留まりやすく、十分な指導を受けていることを推測させる。教育開始年齢では、すべての音節数において教育開始年齢が18ヶ月以下の群のほうが正答率が高かった。これは、早期教育の効果であると考えられた。コミュニケーション・モードでは、すべての音節数において手話群の正答率が一番低く、手話及びキュード・スピーチ群の正答率が一番高かった。しかし、モードの違いよりも4音節になると3群ともに正答率が急に下がることから記憶スパンに関連した問題が示唆された。

**キーワード**：聴覚障害幼児, 音韻意識, コミュニケーション・モード

## I はじめに

近年、幼児の読み書き行動の基礎要因として音韻意識が取り上げられるようになってきた。音韻意識の研究は、読み障害が教育問題となっている英語圏で盛んである。

我が国でも最近、ようやく音韻意識に関心が向けられるようになった。原(2001)は221名の幼児・児童を対象に音削除、単語逆唱、母音同定の課題とひらがな短文の読解課題を行っている。その結果、就学前の1年間に3拍語の音削除と逆唱課題をこなす音韻操作能力が整い、ひらがな指導を受けた後は4拍語の逆唱、6拍語の音削除、CV音節中の母音同定が可能になることを示した。尾川(2001)は健常児64名に音韻操作能力検査(モーラ分解検査、モーラ抽出検査、仮名文字配列検査)を行っている。モーラ抽出検査として「/ka/の有無と定位」、「単語内文字の位置」、「語頭音の抽出」の3課題を実施した。その結果、年齢群別正答率80%以上を能力が獲得されたとみなすと、語頭音抽出は4歳代、/ka/の有無と定位及び文字の配列は6歳代に獲得されていることを示した。

障害児を対象にした音韻意識に関する研究は、盛んに行われているとは言えないが、むしろ通常の子どもの研究よりも早くから手がけられている。天野(1977)は、中度精神遅滞児に分解・抽出の課題と読みの習得

に関する分析を行ない、長期間による訓練を行うことで音韻の分解・抽出が可能になったことを報告している。斎藤(1978)は、この天野の実験を聴覚障害児(5歳、小学部1年・2年)に行なった。その結果、音節分解は健聴児より発達が遅いが、聴覚障害児も健聴児と同様の变化傾向が見られたとしている。音節抽出課題は聴覚障害の5歳児が健聴の4、5歳児の平均成績を上回っていた。

しかし、この結果は、学年対応の教育を受けている子どもの結果であり、必ずしも我が国の多くの聾学校の実態を反映しているものではない。聾学校では幼稚園段階から文字を使って指導し、読み能力を高める工夫をしているが、学齢段階の聴覚障害児の多くが読み

に困難をかかえている。すでにアメリカの聴覚障害児教育においては音韻意識の観点から読み研究を進めているが、我が国ではこうした視点から読みの指導法の研究は進められていない。

そこで本研究は、聴覚障害児の音韻意識の指導プログラムの開発を意図した。試行的に音韻意識の指導プログラムを作成したので、本報告では、その経緯とそれを利用して、聴覚障害幼児の音韻意識の発達段階を検討したのでその結果を述べる。

## Ⅱ プログラムの作成の経緯

### (1) 契機

A 児(現在，小学部 1 年生)は，聴覚障害の発見が遅れ，3 歳になった時点で判明した。聴力は補聴器を装着して 40dB くらいで聴き取ることができる。しかし，聴覚障害に対するフォローが遅れ，乳幼児相談をほとんど受けることなく幼稚園へ入学したために母子関係の歪みなどが見られた。

A 児は，現在，学年相応の教科学習を行っているが，言語獲得を目指した指導も並行して行っている。A 児が幼稚園 5 歳児のときに音韻の文字刺激によるゲームを構成し，指導を試みた。子どもが好きな動物や昆虫，生活の中で目にするはさみなどの道具や食べ物を絵で提示し，音韻数を知らせる。音韻はいくつかの文字カードでヒントとして示し，子どもに選択させる。正解すれば星がもらえる。点数表に記録され，誰かと競争することが可能なゲームであった。これは，母親の音声，文字と指文字の視覚的な情報から音韻意識の形成を目指したものであった。

次に，「これなあに」というビデオ教材を作製した。この教材には，「動物編」と「生活編」がある。「動物編」では，ぬいぐるみを用いて，少しずつ動物の全身を見せていく映像によって動物の名前を当てさせる。音韻数は，アンパンマンの鼻を光らせる回数と○の表示によって知らせる。その後，ひらがなによる文字提示，キュード・スピーチ，手話によって正解を知らせるものである。また 2 語文の表出を促すために動物が歩く映像を見せ，「□○□」のカードを提示することにより主語と助詞「が」，動詞「あるく」を意識させて言わせる内容も含めた。「生活編」では，様々な動詞を用いて同様に物の名前を当てさせ，2 語文の表出を指導した。

ビデオを見るときは，母親と一緒にについて一時停止機能を使いながらゲーム感覚で遊んで欲しいと伝えしたが，家庭ではあまり使用されず，個別指導のときのみに使うことになってしまった。ビデオ教材では，A 児の興味・関心を引くことが難しかったため，ゲームソフトを開発したいと考えた。

そこで「ことはちゃんのことばのがくしゅうげーむ」を試みた。ことはちゃんとは，ゲーム上のキャラクターである。

### (2) ゲームの作成意図と概要

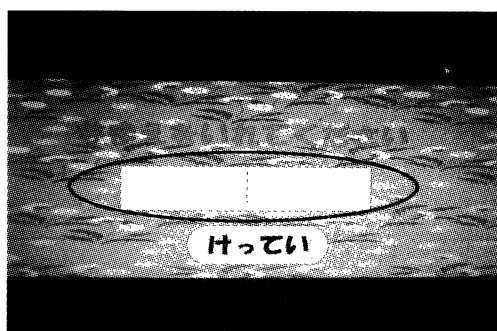
このゲームは，「生活の中で知っていることば」，「文字」，「語順」を視覚情報として提示し，段階を迫って正しい日本語表記へと導くためのゲームソフトである。

以下，『ことはちゃんのことばのがくしゅうげーむ』の概要を示す。

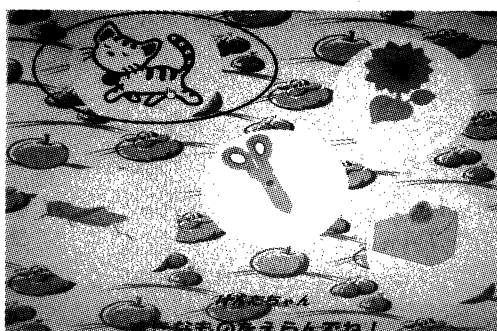
#### ① はじまりをクリックしましょう。



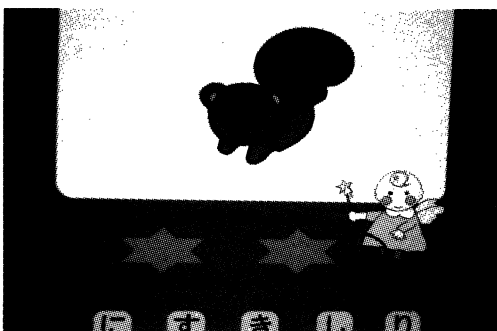
#### ② セルになまえをいれます。キーボードでなまえをうちましょう。セルになまえがはいったら，けっぺいをクリックします。



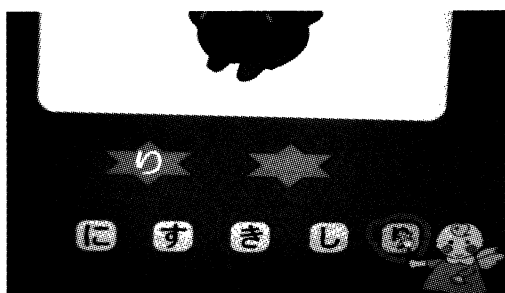
#### ③ 「どうぶつ」，「しょくぶつ」，「むし」，「どうぐ」，「たべもの」から，すきなものをえらんで，カーソルをもっていきましょう。たとえば，どうぶつをえらんだとします。



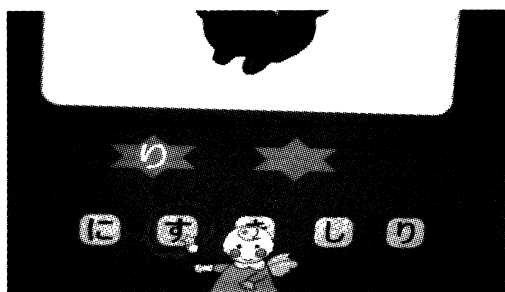
#### ④ 3つのパネルがおちてきて，1まいのえになります。なんのどうぶつですか。なまえをかんがえましょう。ほしのかずが，どうぶつのなまえのヒントです。



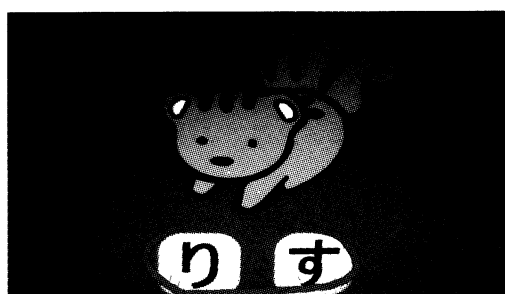
- ⑤ したのもじから、りすの「り」をえらびました。ことはちゃんのほしのほうで「り」のカードをクリックします。「り」とこえにだしていきましょう。ゆびもじで「り」とあらわしましょう。



- ⑥ もうひとつのほしには、「す」をえらびました。ことはちゃんのほしのほうで「す」のカードをクリックします。「す」とこえにだしていきましょう。ゆびもじで「す」とあらわしましょう。



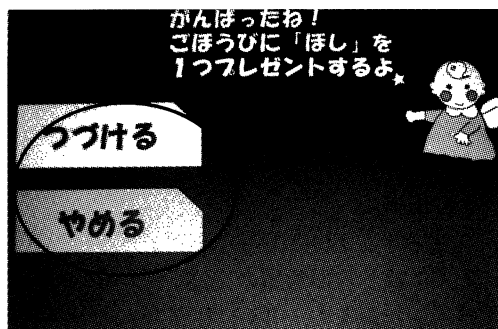
- ⑦ りすでせいかいです。「りす」とこえにだしていきましょう。ゆびもじで「りす」とあらわしましょう。まちがっていたときは、やりなおしましょう。



- ⑧ おめでとう！ よかったですね。ほしがふつてきました。ほしがもらえます。つぎも、がんばってください。



- ⑨ ごほうびに「ほし」をひとつプレゼントしてもらえました。ゲームをつづけますか。つづける、やめるのどちらかをクリックしましょう。



### Ⅲ ゲームを利用した音韻意識の発達の評価

#### (1) 目的

「ことはちゃんのことばのがくしゅうげーむ」は、音韻の合成課題からなっている。これを利用して聴覚障害幼児の音韻意識の発達を検討する。

具体的には、以下の点である。

- ① 聾学校幼稚部の3・4・5歳児学級に在籍する聴覚障害児と幼稚園の年中組・年長組の幼児にゲームの一部を行うことにより、生活年齢別の成績を比較検討する。
- ② 聴覚障害児群において性差、聴力レベル、他の障害の有無、コミュニケーション・モード等の要因の分析を行う。

#### (2) 方法

##### ① 被験児

健聴児群は、X県内の幼稚園に在籍する幼児128名とした。年中児が53名、年長児が75名である。療育手帳を持っていない幼児を検査の対象とした。

聴覚障害幼児群は、Y県、Z県の聾学校に在籍する幼児64名とした。年少児が16名、年中児が16名、年長児が32名である。良耳の聴力レベルは40dB～115dBに及んでおり、64名の幼児の聴力レベルの平均は90dBであった。使用しているコミュニケーション・モードは子どもによって異なり、口話、手話、指文字、キューサイン、身振りなど様々であった。

##### ② 材料

「ことはちゃんのことばのがくしゅうげーむ」を検査用に編集して使用した。検査に使用した語を表1に示す。

表1 検査に使用した単語

	清音のみの語	濁音を含む語
練習用	かに、はさみ	
2音節	りす、きく	えび、ぞう
3音節	かえる、さくら	ぶどう、うさぎ
4音節	ひまわり、にわとり	こおろぎ、あさがお

## ③ 手続き

被験児はパソコンの画面上に出てきた絵を見て、5つのひらがなの中から正しいひらがなを選び、単語を完成させる。絵の下に星が描かれており、音節数が星の数で示されている。被験児はパソコン上のひらがなを指差し、検査者は被験児が選んだ文字をクリックする。検査者は誤答や検査時の様子を記録した。

## ④ 結果の処理

分析の視点は以下のとおりである。

## ① 生活年齢と音韻意識の発達

両群の生活年齢を43～48ヶ月群（A）、49～55ヶ月群（B）、55～60ヶ月群（C）、61～67ヶ月群（D）、67～73ヶ月群（E）、74～80ヶ月群（F）に分けて分析を行う。

## ② 音節数と健聴児群・聴覚障害児群の成績の関係

## ③ 聴覚障害児群における要因別分析

今回は、「性差」，「聴力レベル（90dB以下，91dB以上）」，「他の障害の有無（他の障害がある，他の障害がない）」，「教育開始年齢（教育開始年齢が18ヶ月以下，教育開始年齢が19ヶ月以上）」，「コミュニケーション・モード（口話のみ，手話，手話及びキュード・スピーチ）」，「家族内の聴覚障害児・者の存在（いる，いない）」の6つの要因から分析を行った。

## (3) 結果

## ① 生活年齢と音韻意識の発達

表2 清音2音節 年齢別正答率

	年少児		年中児		年長児	
	A	B	C	D	E	F
H			68.4%	75.0%	68.0%	68.8%
D	0.0%	19.2%	8.3%	20.0%	50.0%	47.2%

表2は、清音2音節の年齢別正答率である。すべての年齢群において健聴児の正答率が聴覚障害児の正答率を上回っている。健聴児群ではおよそ70%前後の正答率であるのに対し、聴覚障害児群では年齢によって正答率にばらつきが大きい。聴覚障害児群では、年中児群と年長児群の正答率には大きな差があり、年長児の段階で一挙に成績が上昇している。

表3 清音3音節 年齢別正答率

	年少児		年中児		年長児	
	A	B	C	D	E	F
H			76.3%	88.2%	88.8%	90.0%
D	0.0%	23.0%	25.0%	25.0%	50.0%	50.0%

表3は清音3音節の年齢別正答率である。すべての年齢群において健聴児の正答率が聴覚障害児の正答率を上回っている。健聴児群、聴覚障害児群ともに年齢が上がるにつれ正答率も高くなる傾向が見られる。

健聴児群では年中児群と年長児群の正答率はほぼ同じである。しかし、聴覚障害児群では年中児群の正答率が25%であるのに対して年長児群の正答率が50%であり、年中児群と年長児群の差が大きい。聴覚障害児の年少児群において43～48ヶ月群と49～55ヶ月群とでは正答率に大きな違いがあり、4歳が分岐点となっている。

表4 清音4音節 年齢別正答率

	年少児		年中児		年長児	
	A	B	C	D	E	F
H			78.9%	79.4%	90.0%	91.4%
D	0.0%	7.7%	8.3%	10.0%	43.0%	36.1%

表4は清音4音節の年齢別正答率である。すべての年齢群において健聴児群の正答率が聴覚障害児群の正答率を上回っている。健聴児群では年齢とともに正答率も上がる傾向が見られるが、聴覚障害児群ではそのような傾向は見られない。健聴児群では年中児群と年長児群の正答率の違いは10%ほどである。聴覚障害児群では年中児群の正答率が10%前後であるのに対して年長児群のそれが40%前後であり、両群の差が大きい。

表5 濁音2音節 年齢別正答率

	年少児		年中児		年長児	
	A	B	C	D	E	F
H			89.5%	86.8%	98.8%	98.6%
D	0.0%	11.5%	33.3%	55.0%	67.9%	61.1%

表5は濁音2音節の年齢別正答率である。すべての年齢群で健聴児群の正答率が聴覚障害児のそれを上回っている。健聴児群は年中児群と年長児群の正答率の違いが10%前後であり、正答率に大きな変化はない。しかし、聴覚障害児群では生活年齢が5歳になると急に正答率が上昇する。

表6 濁音3音節 年齢別正答率

	年少児		年中児		年長児	
	A	B	C	D	E	F
H			84.2%	82.4%	95.0%	97.1%
D	0.0%	15.0%	8.3%	15.0%	64.3%	52.8%

表6は濁音3音節の年齢別正答率である。聴覚障害児群の年少児群・年中児群の正答率が0～15%の範囲にとどまっているのに対して、聴覚障害児群の年長児群では正答率が50%を超えている。聴覚障害児群では年少児群・年中児群と年長児群の間に大きな差がある。しかし、健聴児群では年中児群の正答率が80%、年長児の正答率が95%ほどで差はみられるが、聴覚障害児群ほどの大きな差はみられない。健聴児群と聴覚障害児群の正答率を比較すると、年中児群では健聴児群と聴覚障害児群の正答率の差が70%もある

が、年長児群になると正答率の差が大きく縮まっている。

表7 濁音4音節 年齢別正答率

	年少児		年中児		年長児	
	A	B	C	D	E	F
H			60.5%	72.1%	80.0%	74.3%
D	0.0%	3.8%	0.0%	5.0%	17.9%	13.9%

表7は濁音4音節の年齢別正答率である。すべての年齢群で健聴児群の正答率が聴覚障害児群のそれよりも上回っている。健聴児群と聴覚障害児群を比較すると、どの年齢でも正答率の違いは60%前後である。

聴覚障害児群の年少児・年中児群では正答率が5%以下であるが、年長児群になると正答率が15%ほどになり、年少児・年中児群と年長児群の正答率に差がある。

## ② 音節数と両群の成績の関係

表8 健聴児群・聴覚障害児群の2～4音節の正答率

	健聴児群	聴覚障害児群
2音節の正答率	83.4%	39.1%
3音節の正答率	88.9%	35.5%
4音節の正答率	69.1%	16.4%

いずれの音節においても健聴児群が聴覚障害児群を上回っている。健聴児群も4音節では若干、正答率が下がっている。

## ③ 聴覚障害児群における要因別分析

表9 性差

	2音節	3音節	4音節
男(35人)	37.9%	32.1%	13.6%
女(29人)	40.5%	39.7%	19.8%

表9は各音節数に対する男女差を示している。すべての音節数において女児の正答率が男児の正答率を若干、上回っている。男児、女児ともに音節数が増えると正答率が低くなるという傾向が見られる。

表10 聴力レベル

	2音節	3音節	4音節
90dB以下(15人)	33.3%	31.7%	13.0%
91dB以上(20人)	42.5%	41.3%	18.8%

表10は各音節数に対する聴力レベルによる差を示している。両群を比較すると91dB以上の群の方が、若干、正答率が上回っている。90dB以下の群も91dB以上の群も音節数が増えると正答率が下がる傾向が見られる。また、両群とも2音節と3音節の正答率はほぼ同じであるが、4音節になると急に正答率が下がる傾向が見られる。

表11 他の障害の有無

	2音節	3音節	4音節
なし(30人)	37.5%	35.0%	18.3%
あり(10人)	33.0%	30.0%	5.0%

表11は各音節数に対する他の障害の有無による差を示している。聴覚障害以外の他の障害の有無で群分けした。両群ともに音節数が増えると正答率が下がる傾向が見られる。2音節、3音節では両群の正答率の差が5%ほどであるのに対して、4音節では正答率の差が13%となり、4音節になると両群の差が広がっている。特に他の障害がある群では4音節になると正答率が大きく下がっている。

表12 教育開始年齢

	2音節	3音節	4音節
18ヶ月以下(20人)	41.3%	41.3%	17.5%
19ヶ月以上(26人)	30.1%	25.6%	12.5%

表12は各音節数に対する教育開始年齢による差を示している。両群で比較するとすべての音節数において18ヶ月以下の群のほうが正答率がよい。また、両群とも音節数が増えると正答率が下がる傾向が見られる。両群の正答率を比較すると2音節の正答率の差が10%、3音節の正答率の差が15%、4音節の正答率の差が5%であり、3音節の正答率の差が一番大きくなっている。18ヶ月以下の群において2音節・3音節では正答率に違いがないが、4音節になると正答率が大きく下がる傾向が見られる。19ヶ月以上の群では18ヶ月以下の群と同様に音節数が増えるにつれて正答率が下がるという傾向が見られる。

表13 コミュニケーション・モード

	2音節	3音節	4音節
口話群(10人)	40.0%	35.0%	15.0%
手話群(35人)	36.4%	32.9%	14.3%
手話・キュー群(19人)	43.4%	40.8%	21.1%

表13は各音節数に対するコミュニケーション・モード別の成績を示している。3群を比較するとすべての音節数において手話群の正答率が一番低く、手話・キュー群の正答率が一番高くなっている。また、3群とも3音節から4音節になると正答率が大きく下がる傾向が見られる。

表14 家族内の聴覚障害児・者の有無

	2音節	3音節	4音節
いない(39人)	32.7%	30.8%	12.8%
いる(11人)	38.6%	31.8%	15.9%

表14は各音節数に対する家族内の聴覚障害児・者の有無による差を示している。いずれの音節数で比較をしても両群に大きな差はみられない。また、両群とも4音節になると正答率が大きく下がる傾向がある。

## Ⅳ. 考察

### (1) ゲームの試作について

ゲームそのものは作製段階であり、まだ改善点が多く、実用には至っていない。A 児の場合、母親が A 児に対して「ふびんだ」、「やってもできない」、「他の子どもがうらやましい」などの気持ちから、家庭で向き合うことが難しかった。そのためにゲームを作製するにあたり褒めたり、励ましたりしながら A 児と一緒に遊べるものにしたい、という保護者支援の意図も含んでいる。指文字で確認することは、一人だけではゲームができない。文字を見ながら声に出して言ってみる、母親と一緒に声を出して文字を読む、指文字を確認し合うという作業が伴えるようなものを考えている。

ゲームは、対戦形式にして星の数を競い合えるようにしていく計画である。兄弟や友だちとも一緒に遊べるものにしていきたい。また、ひらがなカードの提示は、子どもが選択したら消えるようにすることにより、より選択の意味をとらえやすくすれば、低年齢の子どもにも応用できるだろうと考えている。

### (2) 音韻意識の発達

#### ① 生活年齢と音韻意識の発達

本研究では、聴覚障害児群において発達の傾向はあるものの、健聴児の同年令群の成績には及ばないという結果が得られた。健聴児群の正答率は少しずつ上昇しているものの、どの音節数に関しても大幅に正答率が上がる傾向は見受けられない。したがって、健聴児群では年少児やそれ以前の間に大幅に成績が伸びる時期があるものと推測される。

健聴児群においてはどの音節数でも年中児・年長児群の正答率が70%を超えている。このことから健聴児においては年中児の段階で音韻意識の獲得ができていると思われる。尾川ら（2001）の先行研究では文字配列の能力は6歳代に獲得されるという結果が得られているが、本研究でも尾川を支持する結果が得られた。

聴覚障害児群では、年長児群でも健聴児の年中児の成績には及ばないが、どの音節数においても年中児から年長児にかけて大きく正答率が上がっている。このことから聴覚障害児群では年中児から年長児にかけて文字配列の能力が大きく伸びることが推測される。聴覚障害児群の年長児段階で成績が上昇するのは幼稚部の年少児と年中児に受けてきた指導の効果が表れてきたものと考えられる。

以上のことより聴覚障害児の音韻意識の指導をする場合には、その子どもの生活年齢と経験を考慮した上で指導を行っていく必要があると考えられる。

音韻認識は就学前段階から自生的に形成されると言

われている（原，2001）。健聴児群の成績と聴覚障害児群の成績を比較すると聴覚障害児の成績が低いことから聴覚障害児群の場合には、自生的に形成されるとは言いがたいと思われる。聴覚障害児には音韻意識を高めていく指導を意図的、計画的に行っていく必要があると考えられる。

#### ② 音節数と健聴児群・聴覚障害児群の成績の関係

検査を始める前に絵カードを使って名前の確認を行ったときに、健聴児で「きく」、「さくら」を答えることができた子どもは少なかった。中でも「きく」を答えることができたのは2，3人であった。このことから検査に用いた語の中には子どもになじみが薄い語が含まれていたかもしれない。健聴児において音節数で正答率を比較すると2音節の正答率が83.4%，3音節の正答率が88.9%，4音節の正答率が69.1%となっているが、2音節の正答率が低いのは「きく」を正解した子どもが極端に少なかったことが影響していると考えられる。このことを考慮すると健聴児においては音節数が増えることばを組み立てにくくなると思われる。

聴覚障害児の正答率をみると2音節数の正答率が39.1%，3音節の正答率が35.5%，4音節の正答率が16.4%となり、2音節と3音節の正答率に大きな変化はないが、3音節から4音節に音節数が増えると正答率が大きく変化する。聴覚障害児の場合も健聴児と同様に、4音節になるとことばを組み立てにくくなることが推測される。

今回用いた課題は、音韻の合成課題であるが、この課題に正解するためには音韻操作能力が必要になると考えられる。具体的には、音韻を分解したり、特定の位置の音を抽出したりする能力が必要になってくると考えられる。例えば、「さくら」という語を作るときには「さ・く・ら」という3つの音に分解し、その後ではじめの音を抜き出して文字を選び、2番目の音を抜き出して文字を選び、最後の音を抜き出して文字を選ぶといった行為が必要になってくる。4音節の正答率が低かったのは、拍数が増えると分解や特定の音の抽出が難しくなることが影響していると思われる。

#### ③ 聴覚障害児群における要因別分析

聴力レベルでは、すべての音節数において91dB以上の群のほうが正答率がよいという結果が得られた。これは、聴力が厳しい子どものほうが担任の先生の目に留まりやすく、十分な指導を受けていることを推測させる。

教育開始年齢では、すべての音節数において教育開始年齢が18ヶ月以下の群の方が正答率がよいという結果が得られた。これは、早期教育の効果であると考

えられる。

コミュニケーション・モードでは、すべての音節数において手話群の正答率が一番低く、手話及びキュード・スピーチ群の正答率が一番高くなっているという結果が得られた。しかし、モードの違いよりも4音節になると3群とも正答率が急に下がっている。これは、記憶スパンに関連した問題を示唆している。

聴覚障害児の間見え方には、選ぶ文字は正しくても文字を正しく並べることができない、語中の音をぬかしてことばを作る、などいくつかの特徴があった。選ぶ文字は正しくても文字を正しく並べることができない子どもは、たとえば、「はさみ」という語を「みはさ」と並べたり、「りす」を「すり」と並べていた。健聴児ではこのような間違いをする子どもはほとんどみられなかった。語中の音をぬかしてことばを作る子どもは、「うさぎ」を「うぎ」としたり、「にわとり」を「にとり」と間違えていた。

検査のはじめに単語の確認をして、知らなかった場合には名前を教えてから検査を開始したが、検査になると名前を忘れてしまっているという子どもがいた。忘れてしまった場合には検査者が検査中にもう一度名前を教えて検査を進めて行った。例えば、「あさがお」という語を忘れてしまった場合には検査者が「これは“あさがお”だよ」とヒントを与えるかたちで検査を進めていった。健聴児の場合には一度ヒントを与えれば検査は進行できたが、聴覚障害児の場合には何度もヒントを与える場合が多かった。例えば、指文字で「あさがお」とヒントを与えた場合、「あ・さ・が・お」の4文字が入っていることは覚えられても、その配列までは覚えられない子、語頭「あ」と語尾の「お」は一度で覚えられても、語中の「さ・が」という音までは覚えられない子、語頭の「あ」しか覚えられない子など様々であった。

## V. 今後の課題

ゲームを作製中であり、まだ改善点が多く、実用には至っていない。母親と一緒に声を出して文字を読む、指文字を確認し合うという作業が伴えるようなものを考えている。ゲームは、対戦形式にして星の数を競い合えるようにしていく計画である。ひらがなカードの提示は、子どもが選択したら消えるようにすることにより、より選択の意味をとらえやすくすれば、低年齢の子どもにも応用できだろうと考えている。

今回は音韻の合成課題を用いて音韻意識の発達を調査した。しかし、今回行った課題は合成課題の中の一課題のみである。今後は他の課題も用いながら聴覚障害児の音韻意識を測定していく必要があると思われる。

## VI. 引用・参考文献

- (1) 天野清 (1977) 中度精神発達遅滞児における語の音節構造の分析行為とかな文字の読みの教授＝学習 教育心理学研究 25, 2, 73-83.
- (2) 原恵子 (2001) 健常児における音韻意識の発達 聴能言語学研究, 18, 10-18.
- (4) 尾川亜希子・種村純 (2001) 仮名読みの獲得過程に対する音韻処理能力の関与 音声言語医学, 42, 220-226.
- (6) 斎藤佐和 (1978) 聴覚障害児における単語の音節分解及び抽出に関する研究 東京教育大学教育学部紀要, 24, 205-213.